

押1語 300P

2,107P-1/4

音沙汰 311P
気配 697P
21/3P

2108'-1/2
2113P

魏志 51P 末

伊聲耆振邪狗の朝貢

都 10行

一方そのころ、魏国の帝都洛陽では、伊聲耆振邪狗らが梯儁の帰りを待ちわびていた。

梯儁殿はどのようなされたのだろうか。もう

そろそろ帰洛されてもよい頃だが。―― よほ

と故郷を離れ難くお思いなのであろう。

都に再びその姿を見せる気配は全くなかつ

た。

洛陽の冬の寒さは、いよいよ厳しさを増してゆき、年は毎日に押し詰まっていた。

*

その年の末、正始四年（二四三）十二月

倭王の使大夫伊聲耆振邪狗等八人は、洛陽の

宮城内へ導ひかれてゆき、やがて太極殿

前の大庭に入った。

太極殿が眼前に迫って見える。

三(口)女(工) 116P
底文①-98

大カン7/27 俾(俾は俗字)
1375 振にり載 紀上352同
記載有り。 2, 107-2/4

構造 拵せ かんめら
目差 2088 俦 云425P
目の表情

太極殿 ⑤ 1381P
うわさ 云 221

「おお、あれが太極殿か。何という美しい
何という荘厳さだろう。――我が国の洛陽
の都に、このようにも目のくらむような大極
殿が現出するのはいつのことか。早く、この
目で見たいものよ」
伊聲者振邪狗は、目を輝やかせながら、そ
の尊厳極まりない太極殿の威容に見入った。
傍には、伊聲者振邪狗に従ってきた建築技
師達の鋭い視線があった。
太極殿の構造・規模・材質・色彩などの
全てを脳裏にたたき込んでおくとする気魄
があった。
＊なお、彼等大工達は、
宮大工らの射るような
ところでは、この時の朝貢についての記録が
三国志・魏書中の次の二箇所に見られる。
①三国志・魏書・三少帝紀・第四(齊王紀)
正始四年(二四三)十二月条には、こう記さ
れている。
「冬十二月、倭國女王、倭彌呼遣使奉獻
冬十二月、倭國の女王倭彌呼が使者を遣
り、奉獻した」

はな(き)
話に聞いていたものの

こと

②また、同書曰三国志の魏志倭人伝、正始四年条には、こう記されている。

「其四年、倭王復遣使大夫伊聲耆振邪狗等

八人、上献生口、倭錦・絳青・繇衣・帛布

・丹・木狘・短弓矢、振邪狗等壹拜率善中郎

将印綬

〔正始四年(二四三年十二月)、倭王はふ

たたび大夫の伊聲耆振邪狗等八人を使者に立

てて、生口・倭錦・絳青の繇・繇衣・帛布・

丹・木狘(狘の誤りか)・短弓と弓の矢を献

上した。大夫伊聲耆振邪狗等は、率善中郎将

〔等〕の印綬を賜わった(帯方においてなく都臺で

という意味なのである)。(第三十一章王

ハ伊聲耆振邪狗の項において既述)

■なお、ここに「倭錦」と記されているか、

どんなものだっただろうか。

・万巻三十四三に「倭文幡」とあり、日本

右来の織物をいう。よって倭の文と書く。ハ

夕は織機・シツハ夕はシツを織る機、またそ

の織った布のことという。(「萬葉集」(一)日

こと

倭文
元 2381^p

2.107^p-44

凡そ記83^p

万3-213^p

万3-294^p
凡そ468^p

一参照

●雄略紀四年八月条に「倭文纏」。

六上二に「倭文手纏」。

に「古の倭文機帯」。

「倭文幣」等とある。

●常陸国風土記、久慈郡、静織の里条に、

「上古の時、綾を織る機を知る人あらざり

き。時に、此の村に初めて織りき。云々」

とある。(九州地方で上古の時から織られてい

た綾が、この時、常陸国に伝えられたのであろう。

綾は、模様入りの織物の一種で「倭布」

倭文とも書く。「風土記」日本古典文学大系

岩波書店、八三頁、注十六・十七参照)

●「倭文」は、「倭文」

布「綾」等と同一ものかも知れない。

また、大夫伊勢者振邪狗に随行してきた七

名のうちの多くが、おそらく洛陽の都に留ま

って、最新の建築技術を学ぶことになったの

であらう、と想察される。(既述)

(*)

2, 108^P - 1/2

F425
6/24

とまあ、こうして、朝献の儀式は滞りなく
済んだ。
しかし、本当に一体何があったというのだろ
うか。待てどくらせど、梯儻は、洛陽の都へ
戻って来なかった。
「倭国へ帰らなければならぬのに、どう
したのか」
伊聲者、振邪狗は、義兄梯儻の事を案じ、
大いに気をもみながら、
「伊聲者、振邪狗は、義兄梯儻の事を案じ、
大いに気をもみながら、
なお辛抱強く待ち
続けた。」

*

351^P
3行

注

世の元立ち變じ
重なる

⑦ 2/5

[illegible]

3.

千切水浸皮

右頁の上半分に、大きくはみ出して、
カラーで
掲載下さい。

H21(2009)11.14 ㊥

2/09^P-1/2

類似写真 ㊥161^P-3/4

南北を記載して → 南
おいて下さい。



北
注

142G

写真図版357 龍王(日御子)の居城の西南に隆起お 龍田山の西麓(配水場)から、西北方向を望む。

- ・ 左から、一岳の『金峰山』、二岳の『熊岳』、『三岳』が連らなって見える。
- ・ 西北の方角から、白い雲が次々に流れて来る。

132G 松崎 順子さん、平成21年9月撮影。

おこいりわけ

新や(1)-137頁

㊥2149^P13頁

泰山写真: ㊥2/22^P-3/2

㊥2149^P9頁

㊥2149^P43頁

2130^P-1/3 2149^P 2130^P

2109^P-2/2

ふわりと空中に 浮かびく
詠嘆 229^P 凡士記 474^P
あつた、-- 2082^P 凡士記 474^P 注9
2130^P 1/3 同8 凡士記 474^P 注9

小ないでいて下さい。
その心を私の方へなびかせて、私
貴方は遠くに離れておいでではありませんが
千切小切に離れて私の方へ漂ってきます。今
大意 夜麻等国の方へ風が吹きつけ、雲が
退き居りともよ 吾を忘らすな
夜麻等々に風吹きあげて雲放水
飛ばして、こう歌った。
きたように思えた。神女は、送
いや、耳に聞こえたあの
するとその時、風の音なのだろうか。――
雲が立ちわたり、水の水の浦島子の神
女（乙姫）の言葉（歌）を持ち、渾び伝える
雲が立ちわたり、水の水の浦島子の神
大意 常世の国（大倭国）の方に向か
浦島の子が言持ちわたり
常世の国（大倭国）の方に向か
水の水の浦島子の神
歌を詠んだ
水の水の浦島子の神

H4.1.16

H10.8.15

2128-1/2

2,110P

ひく・開ける 11月10/14

凡そ記475

注に「海の彼岸」

四国の歌は 2131-1/2

凡そ記474

と解さる。

から遠い

隔てた国に居た、

大海を

浦嶋子は、夜麻等国（邪馬台国・常世の国）

世の国）に居り、

神女（乙姫）は、夜麻等国（邪馬台国・常

世の国）に居り、

波書店、四七四頁、注九（十二参照）

かった。（「風土記」日本古典文学大系、岩

波書店、四七四頁、注九（十二参照）

浦嶋子（梯焦）は、海のかなたの常世の国

ては返（波の音が）聞えてきます。

浦嶋子（梯焦）は、海のかなたの常世の国

あけ（朝、我家の戸を開けて）ながめやっ

いと、常世（夜麻等国）の浜辺に（女）寄せ

大意（乙姫を）慕いつつ（ひとり寝）た夜が

常世の浜の（浪の音）聞こゆ

（朝戸を開き）吾が居れば

こう歌った。

浦嶋子は、恋のおもいに勝えずして、更、

①②の歌の右の字に合あせる

前々 1459

2.111^{P-1/2}

因みに述べる「從來」

夜麻等々に風吹きあげて雲放れ
退き居りともよ「吾」を忘らすな

という「回」の歌の中の「夜麻等」について、

「夜麻等」は日本国の意に解すことも出来る
が落ち着かないし

といわれている。「風土記」日本古典文学
大系、岩波書店、四七四頁参照

なるほど、

へ浦島子は日本国の沖「龍宮城」へ行った。

大海中の

「と」ころか何と「龍宮城」は夜麻等（日本

国）にあつた「神女（乙姫）」が住んでいる

というのでは、全く筋の通らない理解「難い」
話となつてしまふわけである。

では、どう解釈したらよいのだろうか。

この物語において、次のように考えてみ

たい。

(1) 夜麻等は、——もともと「邪馬台国」（日本列

③ 2110 三歳 12.12.472
④ 2096P19行

2.111-2/2

むかしは
昔 2144
1633 2 1/2

改行

島西域「北九州・山口地方」の中核をなす国を意味していた。
* として、神女（乙姫）は邪馬台国の龍神の宮
に仕込んでいた。
(2) 一方、浦島（梯儼）は、中国の人であっ
た。
(3) 浦島の子、九州北部に居住する、丹後国の筒川
の村に移住し、やがて早部首と称された。
と、いうことなのであろうと想像される。
「龍宮城は、日本の沖の海の中にある」と
と理解し、がちだ。そして、この固定観念
から脱却するのは、容易でない。
「そこでは、この「夜麻等（ヤマト）の歌の意
味が通らなくなるのであつて、実は、
「龍宮城は、中国の沖の大海の中にあり。そ
うして、浦島（梯儼）は夜麻等（邪馬台国）の
龍宮城に三歳遊んで帰国した。」
と読み取るべきなのであらう、と思ひやる。
なお、三番目の浦島子の歌においては、常
世国（神仙境）を天上とせず、海の彼方の

21281-3/4 354
2110-19行

263 264
図表

高野山

とくみつ
特筆

こととしていて、注目される。(「風土記」日本古典文学大系、岩波書店、四七頁、注十二参照)

*

また、さらに述べると、

・「常世」に「雲たちわたる」

・「常世の浜の浪の音」

などと歌われているが、

夜国でない)は、すでに述べた通り、倭人

達の国(つまり倭国)の、を指しているよ

うに思われる。(「荒筋、第一編」長寿の秘密)の

項において既述)

例の「天石窓」における「襲名の儀式」によ

り、名と年令と地位とを受け継いで長寿を保つ

倭人の国は、まさに日常世国と呼ばにふさ

ゆいのである。

察するところ、

Ⅲの歌の「常世」

Ⅱの歌の「夜麻等」

2128^{1/2} H4.1.17
H10.8.15

H30(2018)5.26(世) ~ 2.27(4回)

下

2.11/2^{P-2/2}

こと

1字アキ

国の歌の「常世の浜」

は、みな同一の所、

邪馬台国(肥)

後国)を指し示しているのだらうかと思われ。

すなわち、

神仙境(常世の国)とは「夜麻等

国(邪馬台国)のことであり、

浦島子が居るところから、海(うみ)の彼方(かなた)

の神女(かみおとめ)が住んでゐる「常世の国(邪

馬台国)の方へ向かつて吹く風(かぜ)に乗り、雲(くも)が

たちわたりていった

と解釈してみたい。

ここに、蛇足ながらあえて述べると、近畿

地方(ちほう)中央部(ちゅうおうぶ)の大和国(やまとのくに)は内陸部(ないりくぶ)に位置(いち)してあり

海(うみ)からは遠(とほ)い。

つまり、近畿地方(きんきちほう)の大和国(やまとのくに)に日(ひ)浜(はま)は無く

浪(なみ)が打ち寄せ(う)てゐるわけでもない。

国の歌(くにのうた)の「夜麻等(やまと)へしちま」(近畿地方中央部(きんきちほうちゅうおうぶ)の「大和国(やまとのくに)の

こととみなすと、——田(い)田(い)田(い)の歌(うた)が、とりと

めもないようになつてしまふ(意味(いみ)が分(わ)ら

なくなる)といえよう。

※ 田(い)田(い)田(い)の歌(うた)に關(かん)しては、第三十一(さんじゅういち)章(しょう)「宇良神社(うらじんじ)の項(こう)

2110⁷ 5行

2113^P

山東塊

新巻

288

梯儼殿はどうなされたの
だろうか
2107-1/4

留まる 1611

2107-1/4
2108-1/2
改行
タイトル

年が改まったというのに、梯儼はまだ洛陽
の都へ帰ってこない。とはいえ、
でも洛陽の都の内に留まり、梯儼の帰京を
待ち続けるわけにはいかなかった。
うむ。梯儼殿を探しに行こう。
幾人かの従者と共に、掖邪狗は洛陽を後に
した。船は黄河を東へ東へと下ってゆく。
「阿姉の夫君の身に、何か不都合なことで
も起ったのであろうか。」
掖邪狗は、黄河を下る船から降りて、急ぎ、
右手に見える山東山塊の山中を、目指した。
掖邪狗は里人に梯儼の居場所を尋ねた。
「え、テイシュンって。ああ、東海海中の
龍宮城から帰ってきたと本人が言っているあ
の梯儼さんのことですか。さあ、今どこにお
いでなのだから、分かりませんね。何しろ、いつ
も越に浮かされたようにフラフラと迷うて
おられて、時々思い出したように、ひよっこ
りこの郷へ帰って見えるのですよ。」
そして又、寄り集まってきた女達は口々に
梯儼のことを哀れがり、あるいは冷淡に突き

曲草 209.3P 3L子が4いたところ
2,114P 泗水 22/14

こと

放すように言うのだった。
「せめてもう少し早く帰ってくればよかった。
ただのだけれ。そうすれば、家族の者があんなに
までも惨な思いをしなくてすんだのに」
「ええ、そのとおりよ。気ままに遊びほう
けているものだから、こんなことになったの
よ」
「坂邪狗は、郷の内外をくまなく探した。
孔子（丘）の生地である曲阜県にも行き、
また泗水の流れに沿って歩いてみた。
「いかり、梯儼がどこに居るのか、どうして
も探し出せ」とは出来なかった。
まるで、雲隠れでもしたかのように、つか
まえどころさえないのだった。
こうして、数日が瞬く間に過ぎていった。
「梯儼殿は一体どこでどうお過ごしなのだろ
うか。」
「よし、今日は少しばかり足を伸ばし
て、あの丘にでも登ってみようかし」
「坂邪狗は、無駄だろうと思いつながら、左

平凡社地図 35^p 1冊
 大池田水, 陪尾山, 陪尾山 } 2991^p
 大池田水, 陪尾山, 陪尾山 } 2991^p

右に曲りくねった道をたどり、
上流の懸崖山と、小高い阜の境に到った。
西北には、あの泰山がひときわ美しく聳え
ていた。(写真図版 358 参照)
「やはり梯儼殿は、このあたりにもおいで
にならないううだ」
坂邪狗は、長嘆息した。
「ああ、東海の常世国、邪馬台国よ、
都の内では日御子が、どんなにか待ち焦
がれておいであううに。」
梯儼殿をお連れすることか叶わなればかり
か、梯儼殿がどのようなお積りなのかその御
心の内さえも知り得ずして、この地を去り、
帰朝したならば、アーアー阿姉は、きつと失望
され、力をお落しになるであらう。
大きく西に傾いた太陽の光を浴び、赤味が
かった輝く雲、泰山の幽玄な姿に、
見入りながら、坂邪狗は、余方にくれて立
ちつくしていった。
「と、そんな時、うしろの繁みの方から囁く
ような声かした。」

カラー (できるだけ明るくして下さい)

2,115^P-2/2

左頁の上半分に大きくはみ出して掲載下さい。

真向の
泰山
2108^P-
3/2 10^P

斜めの
線を消して
下さい。

カスレを
まわりの色に
合わせて
下さい。(2ヶ所)

この横線
をボカして、
目立たない
ように願
います。



132G

142G 写真図版 358

泰山

電たいざ

泰山 (1524 X 1118)

『中国 ① 仙人のふるさと』 山東省文物展 大阪府立弥生文化博物館 1996年10月12日発行 76頁参照。

そこはかとなくとめると云々 2176^r ただよ
 目許 目のあたり 2197^r 漂う
 云々 1305^r とこという云々 見入 1375^r 2.116^p

「あの、……もし。伊聲者、振邪狗殿」
 振り向くとそこに、痛痛しくも、なんと
 もみすぼらしい老人が一人、極悪に立って
 いた。
 「お会いすまいと思っていたのですか、し
 かし一目だけでもお目にかからぬ訳にはいく
 まいと考え直し、貴方の後を追って、ここ
 へやって参りました」
 顔中を皺だらけにして、如何にも懐かしそう
 に微笑むその老人は、髪も眉も鬚（あごひげ）
 も真白であつた。
 へはて、この御仁はいつた何方であつた
 ろうか？
 振邪狗は、狐につままれてゐるような怪訝
 な面持ちで老人を見つめていたが、つくづく
 とその面凝視するうち、……そこはかとな
 い優しさで漂う目許に、なんとなく見覚えが
 あるような気がしてきた。
 「あ。あなたは梯儼殿。梯儼殿ではありま
 せんか。ずい分あちこちお探し致しましたぞ。
 もうお目にかかれないのではなからうかと、

H4.1.18
H10.8.15

うな 促す 203

2,117^P

長 長 長
長 長 長
長 長 長

天 天 天
天 天 天
天 天 天

目 目 目
目 目 目
目 目 目

「それにして、よくぞよくぞ」
下さいました。邪馬台国におわす日の御子も
さぞかし貴方様の御帰朝を樂みに待つ
ておいでのことでしょう。さあ梯儼殿、一緒
に邪馬台国へ帰りましょう。
両親を無くす、すっかり孤独の身に
なつて、まわした梯儼殿は、
郷の地に無為に留まつてゐるよりも、邪馬台
国の都へ引き返そうと考えるおられるに違
ない、と思ひ、
倭国の都城への帰還を促すのだった。
だが、梯儼は悲しうに頭を振つて言つた
「はい、いえ、邪馬台国へは帰れないのです」
馬台国へは帰れないのです。
老いて涙もろくなつたのであろうか。その
目にはすでに白いものが滲んでゐた。
梯儼は、溢れる涙にむせびながら、こう語
った。

こち 2/5 11

て 13
手の平 } 21532^p
掌 }

永55 16549

かな
ア裏にく

2,118

小林 元
903P 14-0
「ていた」
2005.5.1

see! 功
功 功

て来てか

悲

人の心

都
の
人

冷

で
故郷

か
元
居

1. 田 (Rice field)

頻

11	大	後
----	---	---

1195

いのち

立
か
増

[illegible][illegible]

の
で
す

まてはこ

土手竹根

20

は
出

克己に復し禮儀を伝へ

外音(一) 343' 260' 2,119P

おきさ 云 P 面差 327 見入りながさ 215

白雲 82-385P

思ふに恐らく

固い

に背む

前頁5行

「亀比売と約束を破くて玉手箱の中から立ち昇る白雲が、たちまちにして私の情を奪いきり、膚に皺を作り、黒かった髪を真白にしてしまった」
「振邪狗は、言葉もなく、すっかり変わってしまつた。梯傷の面差を見つめていた。
「振邪狗殿がこの地にいらつてやって、私をお探さだ」という風聞を耳にしたのは、大分以前のことであつた。それ以前、遠く、貴方様のお姿をお見かけした時は、本当に嬉しうございまして。
けれども、古いさらばえてしまつた哀水な田の姿を敢えて曝す気にはとてなれませんでした。
とはいへ、私の胸の内には、未だ人としての心が残つていたようです。
私は、口禮を復み外すようなことを思ひはしてはいけないう思ひにかられ、居た堪れず、恥も外聞もかなぐり捨てて、此処へやつて参りました。
お別れの御挨拶もせず、亀比売をはいめ

北にけむす

衣 438 切なり

530 鬼神 17に453 2/20

泰山 2108 1253 118 頂

泰山 2108 249 2088

リ下さ 2108 まつわりついて

とする倭国の方々に背を向け、永遠に別れて
しまつてよいものではありません。それでは
あまりにも悲しすぎます。
私はもう、いままさら邪馬台国へ帰るわけに
は参りませんが、私の心の内の想いだけは、
亀比売に伝えてほしいと存じます。
と、仰つていただきたいと思つたので、
「リヤ梯儼殿。梯儼殿の胸の内、哀しく
も身に沁みて、拝察申し上げます。しかしな
がら義兄君。玉手箱の蓋を開けたとか、髪が
白くなつたなど、
些細なことではいましませんか。共に万歳を
期つた御二人の意が今もなお金石に等しいな
らば、立ちはだかる鬼神達もえを避けるに違
いありません。梯儼殿、御心を強くお持ちに
なつて、是非とも我等と共に常世の国へお帰
りください。
しかし梯儼は、首を横に振つた。そして、
泰山の頂に纏わりついて去り難げに細

小林 554

改行 改行

乙2/21^P

560.3.30 ㊥

く棚引いてゐる白雲を、と見つめながら
こう言うのだった。
「そのお言葉、誠に有難く嬉しい限りでは
ございりますが、でも振邪狗殿、私はもう心を
決めてゐるのです。私は、こんなにも老いや
つれた身窄らしい姿を、邪馬台国の人々にお
見せたくはないのです。
もしも倭国の都へ帰還したならば、必ず
ずや、かつての私の誇りさえも傷ついてしま
い、そして私は、今より幾層倍も惨めな
思いをするでしょう。
しかし、私には、邪馬台国での数々の楽し
かった思い出があります。龍宮城は絵にもか
けないほど美しく、乙姫は心根優しく、と
りどりの御馳走や趣向を凝らした舞踊りはた
だ珍しく面白く、月日のたつのも、全く、夢
のようでありました。
私は、もうそれだけで充分、仕合者であつ
たと思つてゐるのです。私は本当に幸でし
た。亀比売には、どうかそのようにお伝えい
ただきとうございます。
それでは、振邪狗殿、遙かに遠い道程、どう

H30(2018)5.27(日)~29(火) 「冬の間」といふと
 244年の春である(立春後だから) 2.122^P
 尾根 2315^P 九上 474^P 5行
 林 2-387^P 2041^P 3/2
 振り出し 2273^P 振り出し 2196^P B.リはなす

そ御氣をつけてお歸りになつて下さい
 梯僂は、別れの言葉もそこそこ、振邪狗
 の引き留め手さえ振切りようにて
 暮れなぬ泰山の方へ立ち走り、叫び袖振り
 反側び、足さり一つ去つていくのだつた。
 (万巻九一七四〇参照)
 そーて、哀れを誘うその淋しげな後姿が
 かなたの尾根の岩陰に見えなくなつてしまふ
 かと思つたとき、梯僂は、つと、名残り惜し
 そうに首を廻らして振り返り、いつと蹠蹠人
 だ。
 梯僂は、涙に咽ひ、徘徊り、感極まつて慟
 哭し悲しんでゐたか、しやかて、――
 涙を拭いっつゝ、丘の向うへ消えていつていま
 った。(ハ)丹後国風土記逸文レ八瀬嶼子ノ条
 参照)

＊

山の上を、冷い風がヒューヒューと吹き

略取

203P
209P
207P

2.123P

東の国々拘奴国々の侵蝕

すつかり厚い雲に覆われ、しまった泰山の

霊峰を後にして、黄河の流水を下つて行く

邪狗らの乗った船は、
やがて渤海に至る

た。つまり、ここにまた、長い長い海路の

旅が始まった。

山東半島を離れ、黄海を渡り、
帯方郡に

って太守弓漣に朝貢の報告を、
に御礼を述べた

後、
倭国に

つて水行し、
倭国を

へと舞い戻った。

伊勢者、
倭国に

倭邪狗が上陸するやいなや、
東の国々

国々との戦況が伝えられた。
総帥である

倭邪狗が上陸するやいなや、
東の国々

国は倭国との国境を侵し、
掠奪の限りを

つて

国は倭国との国境を侵し、
掠奪の限りを

つて

H31(2019)1.19(土)~1.20(3回)
令和2(2020)10.17(土)~10.18(4回)

2,124^P

㊦ 205^P-1/2

10/18 F 10/17

うぬ。何とてく水ようぞ
伊聲老振邪狗(リ去來紗別尊・月読尊)の
目には、もうすでに、燃えるようなキラキラ
した鋭い輝きが宿っていた。

浦島子伝説

「皆の者よ。支あ急いでくれ。對馬国から
一支国へ渡り、——一支国から香椎を目指

せ。——
倭邪狗は、一刻も早く女王日御子のもとへ
直接

赴いて事の次第を語り、——その後直ちに東
の拍奴国との戦闘に駆けつけなければならな
い」と思うのだった。

倭邪韓國を後にした船団は、對馬国を経て

やかて一支国へと至った。

軍神伊聲耆倭邪狗（リ去來紗別尊）の外

國からの帰還を、氣を揉み未だか未だかと待

ち望んでいた人々の間から響動めくばかりの

大きな歓声があがった。——勇壮な衆の音が

高らかに響き渡った。の喜び

——かし、そうした歓迎一色の中に、

梯偶様は、梯偶様はどうなされたのです

か。梯偶様は、何処においでなので、ようか

と尋ねまわっている愛姫の姿があった。
だが何と

2.126^P

二と

《梯僂様は倭国へ戻ろうとされませんでした》

と聞き知った時、愛姫は力なく泣き崩れた。

「梯僂様が中国にお留まりになつたつて、本当なの？ 梯僂様はもうこの国に帰

つて見えられないことはないのかしら。——ああ、やはりあの時、無理にお願ひしても

ついて行けば良かったのだわ」

へ必ず再会できる」

と信じて、一先国まで出迎えに来ていた愛姫は

夫梯僂が残っていた幼い男の子を胸にぎゅ

っと抱き締めたまま、なすところも知らず、悲しみの涙を流しつづけた。

*

④2081^P ④2133^{P-1/2}

2.127^P

社大親293^P
④1509^P

みちと 湊町 和井路33 網野(能野郡)夕日港あたり
「湊」という④1509^P
⇒ S60.3.12④

① 梯嶋が、魏国帯方郡からの使者として、倭
た、と仮定してみたい。
(Ⅱ浦嶋)を祀る社が、次のような所にあっ
な、全くのあてずっぽうながら、梯嶋
を建立したのではなかろうか。
その事跡を標そうと発憤興起して、諸処に社
の子孫達は、始祖・梯嶋(Ⅱ浦嶋)を慕い、そ
もいかしたら、この後、梯嶋の子や、そ
の事跡を標そうと発憤興起して、諸処に社
な、全くのあてずっぽうながら、梯嶋
(Ⅱ浦嶋)を祀る社が、次のような所にあっ
た、と仮定してみたい。
① 梯嶋が、魏国帯方郡からの使者として、倭
国本土へ最初に上陸したところ、東松浦
半島東岸の湊町付近、
謝半島東岸、筒川の宇良神社に、あたりに
相当する地
② 倭国の女王日御子の夫となつた梯嶋が、最
後に留まつていたところ、東松浦半島西
岸の京泊付近、
謝半島西岸の、網野神社に、あたりに相当
する地
③ 宇土半島基部の任吉の島

* 北岸

④2133
-3/4 所
任吉